salamander
circle
the
第二十四章 トーラの鷺の園
峯村　明

Salamander in the circle

第二十四章の登場人物		
ダーヴェ	……	学術調査団の団長　上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員　民族・言語学者
イリチヤ	……	ヒューダーが名付けた少年
ヘルガ	……	エウメロス王国の王女
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
アマノカガセオ	……	シトリ族の後継者だった若者
ミツハ	……	メッサナから亡命後のメルノの偽名

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー
	ティコ	科学者
	ナシル	本部・事務職員
	ヤスウ	学術調査団の団員
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長
	ヴァリス将軍	レルの父
	カール	王子　ヘルガの弟
	ロウナス	国務省の高官
	アンテロ	レルの副官
	摂政	亡国王の弟
ケストル王国	パウル	国王
	ウルリク	第三王子
	ヘンリク	ウルリクの息子
	ホペオクー	ケストル人の美女
	ソルド	闘技場の警備隊長
黄金門市	皇帝	皇帝
	パソネル	バイスロイの参謀
冥界	冥界王	冥界の王
	ペネトナシュ	死神
	テクトリ	最下層ミクトランの主

世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長　マミヤの父
	オマキ	ホシナの妻
	キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ゴン	ホシナ族の男　（ヤサカオ族出身）
	サノヒコ	王に仕える役人
	フツヌシ	王に仕える者　将軍
	ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	チドリ	アマセオの妻
	ハマツ	チドリの養父
	タマシギ	ハマツの実子
	オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	コタエ	〃
メッサナ市	パンテオラ	メッサナ市の総督
	パラム＆パランケ	双子のジャガー　パンテオラの部下
	メルノ	音楽家
	パルダリス	メッサナ総督家の一人　臨時総督代理
	メンドルブ	メッサナ化学者集団の代表
	コモラ	前総督の顧問　最高賢者

目次

トーラの鷺の園
379.
380.
381.
382.
383.
384.
385.
386.
387.
388.
389.
390.
391
.
back number
第二十四章のあとがき
奥付

トーラの鷺の園

379.

　衣装は土埃にまみれ、あちこちほつれていたはずだが、きれいに修繕されて返ってきた。スクナのケガの手当てのために引き裂いた内側のペチコートは手触りも色合いもほとんど見分けのつかない新品に変えられていた。
この短時間の間にどうやって？　ヘルガは気にしたが、ミツハは微笑むだけで答えなかった。

　この衣装で帰ろう、とヘルガは思った。新たに設えた品も用意されていたけれども、丁重に固辞した。いずこかへ行方不明になっていた者が異国の援助をうけたことを思わせる、異国調のこざっぱりした身なりで帰還することはできないと思った。残してきた者たちは閉じられた地下空間の中、限られた物資でぎりぎりの生活をしているはずだから。

　言葉にすればそういった思いだったが、多くの言葉を費やさずとも、ミツハは受け止めてくれている、という印象をヘルガは受けた。それはミツハのまなざしやわずかな所作から感じられるものだった。心が通じている、と感じるのだ。見た目はイリチヤによく似ているとはいえ、こういったところには大きな違いがあった。多くの経験と洗練を思わせる。もしかしたら見た目とはまるで違う時間を生きているのかもしれなかった。

　すっかり体力を取り戻した王女はしっかり背筋を伸ばし、頭を掲げ、陽光に白金の髪

を輝かせた。やがてエウメロスの女王の座に就くこの美しい女性をエスコートする幸運に、スクナは他愛なく喜びと誇りとを感じた。

　長老トヨケは一族きっての秀才オモイカネに、ヘルガとの接見を許さなかった。スクナもまたヘルガを甥っ子に会わせたいとはこれっぽっちも思わなかったから、まさにわが意を得たりであった。（おじいさまとは意外なところで気が合うな）、などと気をよくしたものである。

　ヘルガはミツハのことをあれこれ知りたがるのではなかろうかと、スクナは内心、身構えていたのだったが、ヘルガはついになにも尋ねなかった。そのことが逆に、ヘルガの受けた印象の深さを物語っているようだった。

380.

　ミツハひとりの見送りを受けて、彼らは世界の果ての島を飛び立つ。そのはるか上空で、アマノカガセオが待ち構えていた。

「お待ちしておりました……」彼はまぶしそうな目でヘルガを見た。「こちらへお移りください。大陸までお供いたします」

「美しい鳥ですね」人を三人乗せても余裕のある巨大な鳥の、緑色の羽をヘルガがそっ

と撫でると、「おそれいります」、と、鳥、カガセオは深く響く声で応えた。

「なんだ、アマセオ、おまえさんが送ってくれるのか？」

「はい。トヨケ様からそう承っております」

　ふうん？　とスクナは応じる。だいたい通常空間なら瞬間移動であっという間に大陸まで跳べるというのに、わざわざ鳥に乗って移動とは。
　こいつのことだからいつかのヘルガに対した時のように、図々しく自分で売り込んだのかもしれん、と思った。

　眼下は雲海である。かなり高いところを飛んでいるということだが、息苦しさも寒さも風圧さえも、なにも感じない。周囲の空気を丸ごと運んでいるせいだ。ただ、高速で動いているということだけがわかる。

「アマセオは、ケストル闘技場から掘削中の地下道へ跳び、コタエと合流したのだったな」

「そうです。そして時を待たずにエウメロス、黄金門の代表者が集まって会議を開き、王女殿下、スクナさま、バイスロイ氏とは、評議会のダーヴェ氏と同じ道を進まれたのではないかとの結論に」

「なんですって！　私たちはまさに評議会のダーヴェ氏と同じ道を辿ったのです！　あの日のうちにそんなことが想像できていたというのですか！」

　身を乗り出すヘルガに、アマセオはこっくりとうなずいた。

「私がお二方行方不明の一報を持ち込んだときの衝撃は計り知れないものがありました。居合わせた人々はもちろん、一般市民の間にまで噂が広まってしまい……みな、いっせいに立ち上がり、激しく動揺され……」

「そ、それで！？」

「それから、誰からともなく、『落ち着こう』、という言葉が発せられたのです。『落ち着くのだ』、と。市民の誰かだったようです。『姫は必要があって出立されたのだ』『姫のなさることを、私は信じる』『それがどんな結果を招こうとも』『私はそれすら受け入れよう』『そうだ、私は姫をひとりにはしない。私の心はいつも姫といっしょだ』『我々は誰もひとりにはしないのだ』『我々はひとつだ』『我々はひとつなのだ』……」

　ヘルガは呆然と言葉を失った。自分がいなくなったこと、あるいは現世を去ったという認識のもとに、慣れない閉塞空間滞在を余儀なくされた民たちは恐慌状態に陥るのではないかという懸念をひそかに抱いてきたのだった。バイスロイもその懸念を持っていた。彼はエウメロス人が黄金門に対して起こすかもしれない反乱を心配していた。
ところが、エウメロスの民たちは団結することでパニックを乗り越えてしまったというのだ。
心が乱れ、視界がぼやけた。涙が溢れてとまらない。民たちの恐慌や反乱を懸念した己への恥の思いが強かった。

アマセオは面を伏せていた。彼もまた落涙を止めることができない。『我々は誰もひとりにはしない』、その言葉は異国人アマセオに向けて発せられたものだったのだ。

381.

一般に、パニックは危機的状況にある閉鎖的な空間で発生しやすいと思われている。

だが、完全に逃げ場がない閉鎖的な空間において、生き残りの可能性がない場合、実際にはむしろ、パニック状態には陥りにくいことが知られている。

例を挙げれば、過去の大規模な航空機事故発生時には、逃げ場のない機内で乗客は強いストレスに晒されながらも、一定の理性を保っていたという報告がなされている。パニックに陥り、搭乗口をこじ開けて機外に飛び出したなどの事例は極めて少ない。航空機事故の他にも潜水艦や宇宙船、鉱山での坑内事故などでは、パニックが起こらないことが知られている。

wikipedia『パニック』より

　エウメロス人が特にパニックに陥りづらい、冷静な人々だったというわけではない。人間とはもともとそういうものなのである。

382.

　カガセオが高度を下げ始めた。大海原は終わり、陸地が姿を見せている。

「お、いよいよ到着か！」、と意気込むスクナにアマセオは言う。「ええ、ただその前に、少々寄り道をします――」「寄り道？」

　顔を見合わせるスクナとヘルガをよそに、アマセオはカガセオとなにやら熱心に会話している。

「おい、どこへ連れて行くつもりだ？　寄り道など、聞いてないし、時間がもったいないんだが」

　アマセオは顔をあげてスクナに向かってうなずいた。「王女殿下にご覧に入れるように、お指図を受けております」

　世界の果ての島を発って太陽が昇る方向へ、太陽に向かって洋上を飛び続けてきた。やがて　海がおわり、陸地へと変わり、砂漠地帯や岩だらけの荒野を飛ぶ。そして峩々たる山並み。それはケストル-エウメロスを東西に分かつ国境の山々の、ずっと南方ではないかと思われた。

深い森林が現れ……今、地表がきらめいている。ヘルガは思わず嘆声をあげた。緑の原生林の間に湖が現れたのだ。実に広大な湖だ。あちらこちらに島が頭を出している。高空から見れば湖だとわかるが、地表に降りてみれば無数に入り組んだ河のように見えるかもしれなかった。

「あそこだ、カガセオ、あの島だ。あそこに降りてくれ」

アマセオが指さす先に、島。カガセオは大きく旋回しつつ高度を下げていく。目を凝らしていたヘルガが、あっ、と声をあげた。

「あれは――！」

島の一画に、人工物――航空機！　それも、エウメロス空軍の航空機ではないか！！

スクナも、はた、と思い出した。ヘルガを伴ってケストル王国を訪れた際、郊外の飛行場でエウメロス人のパイロットにすぐに飛び立てるよう、待機させたことを！　その時彼は、ある座標を預かっていて、パイロットに渡した。巨人族に占領されてしまったエウメロスに帰れない以上、それはエウメロス以外の場所だったのだ。

383.

島はまだ早朝だった。朝陽が射し初めるなか、空から降臨した訪問者たちに、航空機の脇に張ったテントで生活していた三人はびっくり仰天、慌てふためいた。

「ヘルガ様ではありませんか！！」「王女殿下！？」

「ロウナス！　アンテロ！　黄金門の――パソネルさまですね！！」

時ならぬ人間たちの歓声に白サギがバサバサと飛び立った。

＊

　ここに到着したときは、正直、何かの間違いではないかと思いましたよ、航空機を操って来たパイロットはこっそりそう言った。しかし何度確かめても指示された座標の通りだったのだ。そこは深い森林の中の迷路のような水系、鳥か、垂直離着陸可能な航空機でなければとうていたどり着けない場所だった。
島は相当大きく、自生する植物は豊富で、木々には花が咲き、実を結んでいるものもあった。周囲の河では魚やエビが捕れ、食糧にはまるで困らなかったという。
「エウメロスも黄金門もすでに無く、飛び立ったところで行く当てもない。しかし巨人族もここまでは来そうにない。ひょっとしたらここは別天地かもしれないと思えてきたところでした」

＊

「殿下、つらい報告をしなければなりません」初老のロウナスはさすがに表情に疲れがみえた。ヘルガはその様子に内心怯んだ。心臓がどくんと高鳴る。相手の手を取り、どんな報告でもききましょう、と力づける。

「一昨日のことです、航空機の通信機がある周波数を傍受しました」
「……それは？」
「ネウトラ評議会の放送でした。『評議会本部を中心に半径四百キロメートル内の居住地の住民はただちに全員地下シェルターに避難せよ。これより通告通り、実験を行うものである』、と」

　ヘルガは全身が冷たくしびれるのを感じた。すっかり失念していた！　バイスロイを救うべく地下道を飛び出してきた直接の要因は、ケストル北方の氷河地帯に評議会の無

人機が墜落したことにある。結局、墜落時の衝撃と発生した熱とが氷河決壊の大惨事を引き起こす、まさに蟻の一穴となったのだが、無人機は中性子爆弾製造に必要な物資を評議会本部へ搬送していたのだ。機が墜落したことによって物資は届かなかったはずだが――それでも評議会は爆弾を強引に完成させてしまったらしい。とにかく、評議会は急いているという印象は当初から強いものがあった。

「それを破裂させたというのね――」思うように舌が動かない。口にするのも恐ろしかった。

巨人族を中性子線によって殺傷する目的の爆弾である。人間に害がないわけがないというのが黄金門の皇帝の見解だったことを思い出す。

「その後、放送は？」の問いに、ロウナスは力なく首を振った。

王女が蒼白になって固まってしまったのを見て、アマセオは事態が呑み込めないまま進み出る。「私が行って、なにがあったのか見て参ります。場所を教えてください」

ヘルガはきっぱりと頭を振って言った。「それにはおよびません。いいえ、行ってはいけません。行けばおそらく、あなたもただではすまないでしょう」それからアマセオに目をあて、「けっして行ってはいけません。いいですね？」、と念を押した。

それから彼女は空を見上げた。森林のかなたに朝焼けのバラ色の雲。世界は大惨事の真っただ中にあるというのに。ここはまさに別天地なのだ。

水鳥が飛び立つ音が沈黙を破る。気がつけば鳥たちのさえずりが騒々しいほどだ。そこはいのちあるものたちが日々をいとなむ場所だった。島を取り囲むように茂る緑のアシの向こうで、純白のサギが羽ばたき、朝の光に水しぶきが清冽にきらめいた。

アマセオは朝日のなかに歩み出た。カガセオは透明な緑のオーラとなって彼を包んでいる。

彼はエウメロスの王女をいざなうにあたり、あるメッセージを携えていた。

384.

――この島、トーラはエウメロス王国より掘り進めた地下道の到達点である。同時にトゥランの地下都市の窓のひとつとなる。諸君の苦難の旅はいずれここで終わり、そしてまたここから始まる。到達点にして出発の地、それがすなわちトーラである。

385.

「だから――なぜあんな子どもをたったひとりで戦わせるのだ！！」

　バイスロイはヒューダーに喰ってかかる。

「ひとりではない。ジャガーが二頭いる」

「そういう問題じゃない！！　あんたらオトナ二人は傍観してるだけではないかと言ってるんだ！！」

＊

　喰ってかかられながら、この男、前より生き生きしてるな、とヒューダーは思った。陰鬱な目で滅入っていたかつてのバイスロイとは大違いである。
迷いのうちにある時はエネルギーが集中できないものだが、いまや彼の精神的ベクトルはひとつに絞られた。メッサナの音楽生迫害事件の中に市民の狂気があることを知り、またミクトランの悪意と嘲笑を肌で感じるに及んで、この二つは関係していると直感したのだった。ミクトランが巨人族を操作していると知ったことも大きかった。永遠の都とも謳われた栄光の黄金門市が無残ながれきと化したのはほかでもない、巨人族が暴れた結果だ。

ちなみに黄金門市とは黄金がふんだんにつかわれた都市という意味ではない。都市としてはむしろ、質素な方だ。古い時代からその都市の支配者がもつ血筋と権力を黄金になぞらえたものである。彼らは史上もっとも古い、高貴な血の一族だった。

得てして、古い血は衰退するものであり、強い力をもつほど堕落の道をたどり、本来の

姿からかけ離れてしまうものだ。ところが黄金門の一族は違った。数万年の時を経、数々の諸種族との混血を繰り返してなお、子孫は黄金門市人の特徴を大きく伝えていた。

　それがバイスロイという人間だった。

＊

「イリチヤは文字通り戦力なのだ。しかし我々は違う。それだけのことだ、おたくにどうこう云われる筋合いはない」

　バイスロイはこの男と言葉を交わすとなぜかイライラせずにいられない。ヒューダーもまた、バイスロイに対してわざとのように言葉を選ばない。結果、険悪な雰囲気になる。

「ヒューダー、もはやどうこう云ってる場合ではありませんよ。あなたはどう見たって戦士なんですよ」

「不本意だ、ひじょうに不本意だ、わかってくれ先生、傍目にどう見えようがオレの腕は大したことはない！　イリチヤに殺されかかったくらいに！」

「あのこどもに殺されかかったって？　冗談も休み休み言え。どれだけ弱いんだ？」

「バイスロイさん、お願いですあおらないでください。ヒューダーはけっこう強いけど、イリチヤは輪をかけて強いんです！！」

386.

　最初にアレを見た時、異様な感じがした。不健康なくらい白い肌、白い髪、赤い目。まるで……白いカエルか白いイモリが人間に変身したのかと思うくらい、つるん、という手触りを感じずにいられなかった

「たしかにそれは気色わるいな、しかしそんな第一印象を受けたやつと、なんで今もいっしょにいるのだ？」

　……哀れに思ったのだ。彼は名前をもっていなかった。生を受けてから一度も名前を呼ばれたことがなかったのだ

「あんたが文官だというのがわからんでもないが。しかし名前を持っていないなどということがあり得るのか。本人が知らないだけでは？」

　名前の授受とは親と子の契約だ。成立すれば親子であるが、成立しなければ親子ではない

「……」

　じっさい、アレは親を恋しがることがない。憎んでいるようでもない。まるで無関心だ。おそらく、契約は成立しなかったということだろう

「正直に云わせてもらうが、それは受け入れがたい話だ。私には受け入れられんかな」

　みたところ、おたくと父上との間には深い信頼関係があるのだろう。ある意味、おたくは幸せに育ったということではなかろうか。ならば受け入れられぬのも無理はない。

「……それほど単純な話でもないんだがな。が……そうかもしれん、己以外の人生を想像し、体験したくて、私はメッサナで演劇を学んだのだった」

　変わった次期皇帝陛下であられる

「まったくだな」

　ふたりはしばし笑いあい、沈黙した。

　アレを哀れに思って、名前をやろうと思った。衝動的に。しかしそれは間違いだったかもしれん……

「なぜそう思うのだ」

　イリチヤとはヒューダーと対の言葉なのだ。すなわち、剣と槍だ。まったく衝動的に、オレと対になる名前をつけた。アレの槍さばきは見事だろ？　アレは槍を持つ者としての生を歩み始めてしまった……

「名前に縛られていると？」

　そう……呪縛……呪いとどう違うのだ

「おい、大丈夫か、ヒューダー」
　バイスロイは本気で心配していた。
「こないだまで滅入りに滅入っていた私が言うのもなんだが、おまえ、疲れてるんじゃないか？　冥界なんぞにいて疲れないとか、滅入らないとか、その方がどうかしてるぞ」

　いや――大丈夫――

　バイスロイは相手の顔をのぞきこむようにし、小声で言った。「イリチヤを、愛しているんだろう？」、と。するとヒューダーは顔をしかめた。

　愛……？　責任を感じている。名づけた者として

「ヒューダー。それはコインの裏と表だ」

387.

　彼らは一度にそう語りあったわけではなかった。怪物たちは次から次へと沸いてでた。ジャガーたちは駆け回って翻弄し、イリチヤは槍を振るった。ヒューダーは隠し持った鞭やナイフを使い、上級賢者ダーヴェは念動の力を放って敵を粉砕し、バイスロイも先だって手に入れた黒曜石の短刀をおそるおそる使ってみた。短刀にはおどろくべき威力があった。少し触れただけで怪物は絶叫を放ち、それこそ粉々に砕け散ってしまうのだ。大げさすぎないかと持ち主が思うくらいだった。
『黒い短刀』が恐るべき力を秘めていると知った怪物たちは短刀を避けるようになっ

た。

　ジャガーもイリチヤも、疲れるということを知らないようだった。が、これではキリがない、とだれもが思い始めた。なにしろ、相手は後退したかと思えばまたぞろ前進してくる、の繰り返し。しかも当方は地理にまったく不案内と来ている。埒があかない。動きがとれない。守りに回ってしまったということだ。
　エウメロスのレルのように戦力を動かす感覚や知識を持っている者がいれば違う展開になっただろうが、ダーヴェといいヒューダーといいバイスロイといい、全員が文官の集まり、当然のなりゆきといえた。

　ただ、仮面の怪物たちを操作しているのが何者かはわかっている。大ミミズク。ミクトランの主だ。

　そうこうするうちに、ダーヴェはあることに気がついた。
　イリチヤは彼ら一行の主戦力だから、率先して怪物たちに立ち向かっている。イリチヤの周囲に怪物たちが群れをなしている。これはむしろ――怪物たちの狙いはイリチヤではないかと――

　ダーヴェがそうヒューダーに伝えようとしたときだった。

　小さなコウモリがぱさりと、戦闘のただなかに舞い降りた。そして宙に浮く羽毛のように槍の動きをひらりひらりとかいくぐり、槍を持つ手に喰いついた。

「！――」
　イリチヤは小さく舌打ちし、コウモリを振り払おうとする。指無しの革手袋の甲の部分だから痛くもなんともないが、なにしろうっとうしい。
コウモリは決死の覚悟を持っているらしく、執拗に食らいついてくる。落ち着いていれ

ば捕まえて引きはがすなど容易にできただろうが、間断なく襲ってくる怪物たちを相手にしているとき、槍を片手に持ち換えて空いた手で、というただそれだけのことが彼には思いつかなかった。とにかく喰いついている方の手をそのまま怪物に叩きつけようと、激しく振った瞬間、コウモリの口がわずかにゆるみ、手の甲から指へとずれた。そしてそこで再び決死の喰いつきに挑んだ結果。

　あっ、とイリチヤは叫んだ。

　コウモリは宙空へ放り出された。その口にイリチヤが嵌めていた指輪をくわえたまま。

「しまった！！」

388.

「どうしたんだ！！」
　イリチヤのただならぬ叫び声にヒューダーも大声で叫ぶ。

「指輪を！！　持ってかれちゃった！！」

「指輪って――」

　イリチヤが嵌めていた指輪はひじょうに繊細で美しい細工がされていた。深い緑色と金色とが、交じりあわらずに、揺らめいているようにみえる。不思議な指輪だった。
　よく見せてくれ、と頼んだところ、あっかんべーをされた。「ぼくが王女さまにもらったんだ。ぼくの宝物なんだから。さわっちゃだめ」

「あの指輪か！？」

「あの指輪だよ！！」

　叫び返しながらイリチヤは、仮面の怪物の頭の上に身軽に飛び乗っていた。「こらー！　返せー！」

「いけないイリチヤ！！　コウモリをかまってはだめです！！　戻ってきなさい！！」
「イリチヤ！！　深追いはならん！！　戻れ！！」

　ダーヴェとヒューダーの制止もむなしく、次の瞬間、黒い怪物の群れもろとも、イリチヤの姿はかき消すように消えていた。

389.

　真っ暗な闇。そこにそいつの目が浮かんでいた。白目に小さな点のような瞳。それは――濡れたようにぼやけていた。泣いているのだ。ひゅうぅぅぅぅ、と風が吹くような音。そいつはすすり泣いていた。

　あとずさりしようとしてぼくはよろめいた。ぐらっとバランスをくずしてお尻が床か地面か、なにかの上に落ちる、そう思った。でもいつまでたってもショックが来ない。落ちていく。底が抜けたみたいにどこまでも落ちていく。落ちていくだけなんだ。

思い出した。暗闇の中を背中から落ちていくこの感覚。前にも同じことがあった。

涙ぐんだ目が落ちていくぼくを見おろしている。いつまでも同じ距離を保って。

390.

かわいそうに
かわいそうに
かわいそうに
かわいそうに

隠隠滅滅とそいつは泣いていた

なんてかわいそうなんだ
こんなことがあっていいものか
こんなことが許されるのか
ひどい
ひどすぎる
かわいそうな
かわいそうな
かわいそうな

私

そいつは自分のために泣いていた

みんなが私をいじめる
みんが私を……嗤う
みんなが私をこんなところへ閉じこめた
私がなにをした？
いったい私がなにをした？
教えて
助けておくれ

キミ
そこのキミ

かわいそうな私を助けておくれよ

391

.

そいつが手を延ばしてくる気配がした。
ぼくはぞっとして、槍をかまえようとした。でも……手は固い槍を掴まなかった。そのかわり、なにかひどく冷たいものがぼくの手を掴んだ。

あああああ、とそいつは声をあげた。

私を救ってくれるのかい？
こんな
こんなかわいそうな私を？
私に手を差し延べてくれたのはキミだけだ

そいつは声をあげて泣いた

第二十四章『トーラの鷺の園』
第二十五章へ続く

back number

第一部

『第一章　世界の果ての島』
はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。
ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章　破滅の襲来』
調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章　変態』
エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチヤ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。
※・サブタイトルについて。
オタマジャクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章　レムリアン・ラプソディ』
ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章　メッサナ』
エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章　脱走巨人』
ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章　メッサナからの逃亡』
知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。
同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章　IRITIYA』
人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。
一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章　原子の火』
のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。
メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。
2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く　-原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章　二極世界』
死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。
並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章　天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。
ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。
そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章　機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激烈な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。
一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章　アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。
シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。
報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。
この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。
アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。
ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章　ヤサカオ　立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。
死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようと考えるが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンはヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章　ふたつの北極星』
かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス−死神と対決する決意を固める。
一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。
オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。
はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章　トゥランの七つの洞窟』
冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買い、ついに見放される。
一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章　ブルー・マーキュリー遭難』
巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がいないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章　王女の冒険』
ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。
ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に呑まれようとしていた。

『第十九章　ミクトランへの道』
ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどことも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章　冥界の巨人』
バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章　メッサナの黄金郷』
ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチヤについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチヤの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチヤとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。
かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチヤの母親は水の精霊である。
一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの本家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章　物質化した太陽光線』
黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……
しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『ミクトラン脱出』
ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。
ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

第二十四章のあとがき

アステカの伝説上の原郷はアステカより北方にあり、チコモストク（七つの洞窟）とかアストラン（サギの多い場所、純白の場所）と呼ばれ、いずれも七つの洞窟と関係しています。『ポポル・ヴフ』のマヤのキチェ族も祖先は七つの洞窟から来たという。水鳥がたくさんいる素晴らしく美しい豊かな土地だった、と。

しかし。エウメロスの人々がマヤ・アステカの祖先だったわけではありません！

この物語上では、この土地をトーラという名にしました。エウメロスはもう出てこないんじゃないかと思われますが、筆者の頭の中ではこの後、地下都市と協力して双方長らく繁栄し、衰退に向かったころ、南下してきたケストルの劣化した子孫に見つかって乗っ取られ、人はそっくり入れ替わってしまった、てなことになってます。時系列的にこれでオッケーです！　たぶん！

そして。終わり際にいやなのが出てきましたですね。どうしたって決着つけなきゃならないんでしょうがないですね。なのでせめて表紙だけでも柔らかな雰囲気にしてみました。

2023年9月24日　記

奥付

Salamander in the circle
　第二十四章　トーラの鷺の園
2023年9月30日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail　blog　D & R
表紙素材　「月とサカナ」　「イラストAC」
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社